成願寺

季報

142

令和6年12月18日
(2024年)

目次

「わたしにとっての観音さま」金田祥道……1
「生前戒名をいただいて」桑田稔子……6
山内短信……8

発行　多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711

令和五年 年末の会説教

わたしにとっての観音さま

静岡県東泉院 副住職　金田祥道

みなさま、こんにちは。本日は伊豆半島は東伊豆町から参りました。東伊豆町は、ご存じの方も多いと思いますが、伊豆稲取温泉、伊豆熱川温泉を擁する温泉地として知られております。令和元年、コロナの直前に成願寺ご一行様が秋の観音詣りで稲取温

静岡県東泉院 副住職

金田祥道師

納めの観音（年末の会）のお知らせ

十二月十八日（水）午後二時より、観音堂に於いて納めの観音様の縁日法要を執り行います。

法要後は書院にてお話と軽食懇親会を予定。

説教　静岡県 利生寺 住職　尾村眞道老師

会費　三五〇〇円

＊軽食の注文数の確定のため、予約をお願いします。

除夜の鐘・参加者予約受付中（一打千円・予約優先）

大晦日　十一時開門―十一時半打ち始め

引き続き、本堂にて新年祈禱をお勤めします。

鐘撞きを予約された方のみご参列いただけます。

大般若祈禱会のお知らせ

令和七年一月十二日（日）、午後一時より大般若祈禱会を開き、家内安全・身体健全・商売繁盛等を祈念します。どなたでも（檀家以外の方も）祈禱を受け付けます。願文を添えてお申し込みください。

泉にお泊まりになり、その際に私が副住職をつとめております東泉院にお詣りくださいました。今日は納めの観音様のご縁日ということでございますが、私ども、東泉院の本尊様は聖観音様でございまして、成願寺様との深いご縁を感じております。

それから私の母は、私の父であり師僧であります東泉院住職と結婚してからは東伊豆町に暮らしておりますが、生まれは中野でございます。本日成願寺様へまいりますことを話しましたら、とても懐かしがっておりました。私も母が生まれ育った中野の町を訪れるのを楽しみにまいりました。

合掌は敬意のこもったご挨拶

先ほど皆様は、観音堂にて無事に師走を迎えることができた感謝の法要に参列をされて、手を合わせていらっしゃいました。合掌という行いですね。私たち僧侶も毎日手を合わせております。この手を合わせるという姿は、ご家庭において、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんが合掌される姿を見て、自然と身についた行いではないかと思います。私もお寺の子として生まれ育ちましたが、父や母から、合掌はこうしてやるんだよ、と教わった記憶はございません。家族の普段の姿から、無意識のうちに身についたんだと、ありがたい気持ちになります。今朝は、いつものように朝のお勤めをいたしましたが、東京まで出かけるということで、特に手を合わせまして、本尊様に、「どうかお見守りください」とお願いをしてまいりました。

合掌という行いは、私たちの日常の生活の中にあります。さらに仏教徒にとりまして、世界共通の敬意のこもった挨拶だと思います。以前、東京駅でこんなことがございました。

着用されていたものから、おそらくタイの方、私と同じく尼僧さんが向こうの方におられました。東京駅のことですから、大勢の人が途切れることなく行き交っているわけですが、ふと、空気を感じるのです。向こうの尼僧さんも、ふと、私に気づかれました。そうしますと、離れたところにいたわけですが、お互いに自然と手を合わせて笑顔で一礼をしました。たったそれだけのこと、それで言葉をかわすわけでもなく、互いに立ち去ったわけですが、清々しい心持ちになりました。

今日は、「わたしにとっての観音様」ということをテーマに、みなさまにお話をさせていただきたいと

思いますが、東京駅で合掌しあった尼僧さまも、わたしにとりましての観音さまだったのではないかと、そんなふうに感じたのです。

本日は、東伊豆町からまず伊豆急行線に乗って熱海駅まで出まして、小田原駅から小田急線で新宿にやってまいりました。最初に乗りました伊豆急行線ですが、私は僧侶になる前にこの路線で運転士をしておりました。

アメリカ人であります夫との間には二人の息子がおりまして、長男は現在二十歳、次男は十三歳でございます。以前も少しお話をさせていただきましたが、長男が三歳の時に、愛知専門尼僧堂というところで一年間修行に励みました。三歳といいますと、まだまだかわいい盛りで、いろいろな思いがございました。息子も母親と離れて寂しい思いをいたしました。また家族にも大変な思いをさせたことと思います。それでも修行をさせていただいたおかげさまで、僧侶としてこうしてみなさまとお目にかかり、お話をさせていただくことができます。息子も僧侶を志してくれまして、間違いなく、両親、夫、息子たちは、私にとりましての観音さまです。三十三のお姿に変化される観音さまですから、ご縁をいただくみなさまも、私にとりましての観音さまなのです。

ハプニングの起きた時こそ平常心を

私が伊豆急行線の運転士をしておりましたのは、二十年以上前のことでございますから、いまと変わっていることもあるかもしれませんが、国家試験を受けませんと鉄道の運転士になることはできません。まずは筆記試験、これに合格しますと、次は実地試験で、実際に電車に乗って運転をします。これに合格して、ようやく見習い運転士です。ベテランの先輩運転士に一か月ほどご指導をいただきまして、やっとひとり立ちができるのです。これで一人前と喜んでおりますと、そういう時こそミスをするという経験をいたしました。

通常、電車に乗務員は運転士と車掌と一人ずつ。役割が違いますから、車掌がそばにいてくれるわけではございません。なにかあった時には、運転士一人で対処をしなければなりません。ひとり立ちをして最初のころは、ハプニングばかりでございました。

運転士は、運転席の扉を開ける鍵と、運転をするための鍵を与えられます。この二種類の鍵を、当時の私は一つのキーホルダーにつけて持っておりまし

た。ある日のこと、いつものように運転席でメーターのチェックをしてから外に出て、行き先表示が正しいか、ライトがきちんと点灯するか確認をしておりました。その時、何かの拍子で運転席の扉が閉まってしまったのです。鍵は二つとも運転席に残したまま。困り果ててしまったというわけです。

伊豆急行線に乗ったことがある、という方はいらっしゃいますか。ご旅行でリゾート電車に乗って下さった方もおいでかと思いますが、この電車は運転席が客席から丸見えなのです。乗車客のみなさんは、出発を今か今かと待たれている状態で、私は「困った、どうしよう、どうしよう」と内心は大いに焦りながらも、お客さまに不安を与えてはいけませんので、表情だけは平静を保っておりました。車掌も運転席の扉を開ける鍵を持っておりますので、表面上は平静を保ちながらも、大急ぎで車掌のいる後方の車両を目掛けて走り出したのです。

実は電車には、乗務員同士がコミュニケーションをとるための電話がございます。またブザーもございまして、ブザーを何回鳴らすか、また何秒鳴らすかなどで意味がございまして、コンタクトがとれる。「どうしよう、どうしよう」と大焦りだった私は、そんな事を忘れて車掌のもとに走って現れたわけですから、車掌も何事かと大いに驚いた。ですけども、無事に鍵を借りる事ができたわけです。これで出発できるとほっとしたのも束の間。当時のリゾート電車は八両編成でした。一両は二十メートルございますので、百六十メートルをダッシュで走って、また百六十メートルをダッシュで戻る。鍵を開けて、今度はその鍵を車掌に返しにまたダッシュ。それから運転席に戻ったわけですから、「時間よ、止まって」と思いながら、情けない気持ちで走りに走ったわけでございます。どうにか定刻に発車することはできたのですが、ハプニングが起きた時こそ平常心ということを深く反省した一件となりました。

日本の鉄道の正確さというのは、世界の中でもトップクラスです。出発が少し遅れましても回復運転というのを行って、だんだんと修正していきます。それは運転士だけではできなくて、その運行に関わる人全ての努力によるものです。ですので、運転士時代といいますのは、一分一秒を大切にして常に時間を気にしていました。「時間よ、止まって」と念じても、止まることはありません。普段の生活であれば気にしない一分一秒の大切さを、運転士時代に学ばせて

いただいたわけです。ハプニングもございましたが、僧侶になった今も糧となる、いろいろな経験をさせていただいたとありがたく思っているのです。

お参りする事で得る力

私は、生まれた時は未熟児だったそうです。すぐに病院に行かないといけないということで、父は私を毛布にくるみ、籠に入れて車を走らせて東京の大学病院に運んでくれました。もちろん現在ならばもっと良い方法があると思いますが、当時はそれが父の精一杯であったわけです。

おかげさまで今はこうして元気にしておりますが、小さい頃はよく熱を出したり、喉が痛い、お腹が痛いということで体が弱かった。しかし中学生になりますと、体力がついてきましたので、バレーボール部に入ったのです。あまり強いチームではございませんでしたが、試合があれば勝ちたい。ですので試合の日の朝は、観音さまに「今日は勝たせてください」とお参りをするのです。しかし、なかなか勝てない。「観音さまにお願いしたって無駄じゃない」、まだまだ子供でしたので、その時はそんな風に思う。でも、懲りずに今度は「観音さま、今日のテストで良い点が取れますように」とお願いをする。お願いをしても、良い点が取れるとは限りませんし、試合に勝てるとは限らないのです。それでも私は、ここぞという日には、特に観音さまにお参りをしておりました。

今、考えてみますと、幼いながらも、観音さまにお参りをさせていただくことが、「がんばる」という決意を固める、力が湧いてくる小さな儀式だったのかと思うのです。

有難い、と気がつくことの大切さ

私は両親と共に家族で一緒に暮らしておりますので、些細なことが日常的に起こります。つい最近は、境内の渋柿を母がむいてくれていました。天日でほしたら美味しい干し柿になりますので、毎年作っておりますが、むいた柿のかたわらに皮が置きっぱなしになっていましたので、私としては気を利かせて肥料にしようと畑で土と一緒に耕したのです。そうしましたら母は、「余計なことをされた」と不機嫌です。何か料理に使うつもりだったようなのです。

私も逆に「余計なことをされた」と思うことが起こります。それは、あとでいただこうと思って置いておいたお茶を洗われてしまうことです。「あとでい

ただくからね」と何度言っても片付けられてしまいます。こういう時、自分に余裕がある時は「まあまあ、お母さんもよかれと思って片付けてくれた」と思うのですが、余裕がない時には「なんで何度言っても片付けちゃうの！」と口から出そうになります。

ですけど、こんな些細なことで争うことはないのですよね。怒りの感情が湧いたときには腹式呼吸をして、本当に必要な言葉なのか少し間を置くのです。そうやって過ごしておりますと、家族で喧嘩をすることもだいぶ減ってくるのではないかと思います。

自分の気持ちというのは、なかなかうまく扱えません。自分の体というのもコントロールができません。お釈迦様がお説きになった生老病死という四つの苦しみを考えてみましても、この四つには自分の意思が働かないのです。

自分の意思と違う、思ってもみないことが起こりますと、誰かのせいにしたり、環境のせいにしたりします。ですけど、「自分には何かのせいにしてしまうところがあるんだ」ということに気づいて、意識して調えていく、調え続けていくことが大事なのかなと思います。自分の思い通りにならないことが当たり前。もし少しでも「思うようになった」と感じることが起これば、有ることが難しい、つまり「有難い」ということになるのではないかと思うのです。

観音様は何もおっしゃってはくださいませんが、いつもこころの中にいて慈悲の眼差しで見守ってくださっています。手を合わせることで自分と向き合い、自分を調えていく。そうしたことを思い出させてくださる、それが観音様なのかなと思います。

本日はご清聴ありがとうございました。　合掌

生前戒名をいただいて

檀家　桑田稔子

現在五十代の私は、令和五年の秋のお彼岸法要の前に、ご住職から生前戒名「智明院秋月久遠大姉」を頂戴した。生前戒名とは仏教の伝統に基づいて生きている間に仏教の教えや戒律に従い、善行を積むことを称えるものだそうだ。頂戴した際には「おめでとうございます。」と言って祝福してくださった。自身の精神的な成長や仏教への信仰を示すもので、お寺の方々からのこの言葉はその尊い意義を称えるものだそうだ。

罰が当たりそうだが、私は敬虔な仏教徒ではない。戒名を頂きたいと思った主な理由は身辺整理である。

いわゆる終活の一環だ。そんな理由ではあるが、お寺は事情を良く理解して快諾して下さった。私は独り身で子供もいない。年齢からいくと家族の中で最後にこの世を旅立つ。親の介護等をきっかけに死について考え始め、自分が死んだ後に必要なことを自分で選んでおきたいと思った。両親が今から十四年前、七十代に同じく成願寺で生前戒名を頂いていたのでの生前戒名の存在は知っていた。

清めの儀式を行う住職

ご縁があってお寺と父はお付き合いが長い。私は子供の時分に何度か父に連れられてお参りさせて頂いたが、それ以来ご無沙汰していた。近年集まりや葬式でお寺に出向くことが増え、ご住職や職員の方々ともお会いする機会が多くなりお寺の話も良く聞く。父も眠っているので、益々居心地の良い場所になってきた。

戒名には尊い言葉が使われている。戒名を頂く前には、方丈さんからどんな生き方をしてきたか尋ねられた。この戒名に込めて下さった思いを理解し、残りの人生は戒名に相応しい人になるべきではないかと思った。戒名の横に添えられた言葉も印象深い。「身心自ら愛すべし　自らも敬うべし」。戒名を手にしたことは、人生最後の旅の目的地への切符を手にしたような気分だ。

参列したご家族、住職、お祝いにかけつけた寺族と記念写真

余談だが、方丈さんは授与式後に一度退席されたが、再び出てきて下さり記念撮影をした。御礼を伝えると「恥ずかしいな～」と手で顔を覆っていらした。私が幼少期に見たのは声の大きな慌ただしいおぼーさんだった。今更だが、本当はとても立派なお寺の偉いお坊さんだとわかった。

父の声が聞こえる、「おい、ありがとうな」。

最後に、戒名を授けてくださり、また下手な文章で恥ずかしいが、このような機会を頂き、お寺の皆様に感謝を申し上げたい。

合掌

昨年の初観音の様子

写仏教室の様子

◎年始め「初観音」のお知らせ

令和七年一月十八日（土）午後二時より、新年初の観音様の祈禱会を行います。お札をお授けします。一月十五日までに願文を添えてお申し込みください。ご祈禱の後はお汁粉で懇親会です。会費二五〇〇円

◎成願寺写仏教室

日常生活の中の祈りを一本の筆、一枚の紙に託し、みほとけを描かせていただく時間はいつのまにか心が調います。初心の方も個人別にやさしくご指導します。どうぞ安心してご自身のペースでご受講ください。詳細はホームページをご参照の上、寺務所（岡島）までご連絡ください。

日　時：毎月第三土曜日　十三時～十六時三十分

講　師：安達原千雪

（仏画師、安達原玄仏画美術館館長、NPO法人「曼荼羅祈り写仏の会」講師）

会　費：一回　三五〇〇円（別途教材費）

◎旧防空壕、TOKYOMXテレビの取材を受ける

TOKYOMXテレビ（地上波9チャンネル）のニュース番組「TOKYO MX news FLAG」（月～金、二十時より二十時半放送）より、旧防空壕が取材を受けました。報道局の牧田更記者とカメラクルー二名が来山。旧防空壕の取材の後、住職の孫・小林尭成がインタビューに応え、その様子が八月十三日から三日間にわたり放送されました。

旧防空壕内を取材する牧田記者とカメラマン

インタビューを受ける尭成